名作歌舞伎全集

第一卷

傾城反魂香　女殺油地獄
嫗山姥　曾根崎心中
国性爺合戦　堀川波の鼓
平家女護島　心中宵庚申

名作新編傑全集

信州川中島合戦
恋飛脚大和往来
博多小女郎浪枕
心中天網島

発行元
東京創元新社

名作歌舞伎全集
第1巻　近松門左衛門集

昭和四十四年十月十五日　発行

監修者
山本二郎
戸板康二
利倉幸一
河竹登志夫
郡司正勝

発行所　株式会社　東京創元新社
代表者　秋山孝男
(162)東京都新宿区新小川町一―十六
電話(〇三)二六八―八二三一
振替東京一五六五

印刷・株式会社金羊社
製本・株式会社鈴木製本所
用紙・株式会社富士川洋紙店
写真版・(株)興陽社、(株)方英社

万一、落丁乱丁がありましたらお取替えいたします。

1969. Oct. Printed in Japan © TOKYO-SOGEN-SHINSHA

目次（名作歌舞伎全集第一巻　近松門左衛門集）

傾城反魂香（吃又・相の山）……三
嫗山姥（八重桐廓噺）……二九
国性爺合戦（国性爺）……（装置図　高根宏浩）……五七
平家女護島（俊　寛）……（装置図　萩原勝美）……九一
信州川中島合戦（輝虎配膳）……一〇九
恋飛脚大和往来（梅川忠兵衛）……（装置図　萩原勝美）……一三一
博多小女郎浪枕（毛　剃）……（装置図　萩原勝美）……一五一
心中天網島（紙　治）……一八九

女殺油地獄（油地獄）……（装置図　萩原勝美）……三三七
曾根崎心中……二六五
堀川波の鼓……二八七
心中宵庚申……（装置図　高根宏浩）……三〇九

解　説　戸板康二
校訂について　山本二郎
郡司正勝

写真と資料提供―演劇出版社、演劇博物館、大谷図書館
梅村豊、吉田千秋

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

傾城反魂香

（吃又・相の山）

解説

傾城反魂香

戸板康二

ケイセイハンゴンコウ。宝永二年八月（一説には宝永五年）の大坂竹本座に書きおろされた浄瑠璃である。作者は近松門左衛門。江州六角家の騒動が背景だが、敦賀の名妓遠山、のちに京六条三筋町の廓のやり手みやと流転する土佐将監の娘の魂が、恋人狩野四郎二郎と契るという、ロマンチックで奇抜な着想が眼目である。そのみやの姿が障子に逆さまにうつる「三熊野かげろう姿」をふくめて、中の巻の相の山が最もすぐれており、その場があってこそ外題の「反魂香」の意味もよくわかるのであるが、久しく上演されたことがなく、この浄瑠璃はもっぱら上の切の土佐将監閑居の一幕で有名であった。しかし、昭和二十七年十一月に「梨苑会」が、千谷道雄氏の校訂でこの相の山を上演したので、今度はその台本を併載することにした。

前の土佐将監閑居は、主人公吃の又平の名前から「吃又」と呼ばれている。この役は、不具の芸術家の苦心と出世の物語で、悲痛きわまる場面が奇蹟によって一変、ハッピー・エンドになるため、心温まる芝居として、古来人気のある狂言であった。

「傾城反魂香」のあとに、享保十七年五月豊竹座の「今様傾城反魂香」（原作の改訂版）、延享元年十二月豊竹座の「遊君衣紋鑑」（為永太郎兵衛）、宝暦二年三月竹本座の「名筆傾城鑑」（三好松洛他）等の改作が出たのも偶然ではない。

この集にのせた台本は、歌舞伎化された中で一番多く上演される、いわば決定版に当るものだが、二代目市川猿之助（初代猿翁）は、「名筆傾城鑑」の方で演じる場合が多く、そのほうだと、段切れに将監が石の手水鉢を切ると又平のどもりが全治、早口のセリフをいったりする所があり、前との照応のおもしろさを見せるのである。これに反して、六代目尾上菊五郎は、原作に忠実に、虎の出る所を本文通り「端場」に扱い、そのあとで又平夫婦が登場する段取りにしていた。菊五郎は同時に、又平がうなぎの料理をする所は勿論、物見をしに花道へ行くことさえ、再演では省略していた。しかし、雅楽之介の物語のあいだ、又平を花道に置く演出は巧みな工夫で、これは見せたほうがいい。

昭和三十年十月に歌舞伎が中華人民共和国に招かれて行った時には、この「吃又」を演じて、好評を博した。この時の台本は「名筆傾城鑑」ではなく、不自然な所を除いたものであった。言葉の通じない中国人が「吃又」を理解し得たのは、原作がよく人間を描いているからでもあるが、一つには、どもりだけに手真似を多く入れて話すからだろうと、のちに日本に帰ってから先代猿之助が述懐していた。なおこの中国での公演で、「吃又」の舞台装置の石刷(いしずり)の襖と、手水鉢の奇蹟を見た将監が「奇妙奇妙」という所で、観客が喜んだのはおもしろいことであった。中国人は、こういう時に「奇妙奇妙」というのである。

所掲台本には、将監の娘お梅が出ているが、時には将監の妻が出ることもある。その時々の一座の俳優の都合で、自由に人を殖やしたり減らしたりする所が、歌舞伎の特色だ。入れ事では、又平のどもりをからかう箇所が、昔からあった。身体障害を笑うのは、あと味がわるい。現在カットされているのは、当然であろう。

「吃又」の又平は、悲劇の主人公のはずなのに、この役がとかく喜劇風な印象をのこして来たのは、周囲の者が舞台で彼をからかったり笑ったりするからにちがいない。料理の所で、下女と又平の会話で、「鉢」「盆」を借りようとする問答は、猥雑な入れ事であり、虎を追って来た百姓が又平のどもりの真似をする所も、同じように、低級な狙いというほかない。

もちろん、義太夫としては、又平のどもり方が至難な技巧とされており、ア行からワ行までのどもり方の口伝(くでん)が、伝わっているほどだ。歌舞伎の方でも、どもるセリフ、特に「遠州祐定(すけさだ)、あっちへやるか、こっちへとるか」あたりのいいまわしに苦心がある。この作では、元来流暢にものをいうことを苦心して来た俳優の舌を封じる興味が大きかったかとも考えられるのである。

しかしこの場の真髄は、口べたな夫の苦悩と、夫をいたわる妻の愛情とにある。又平が「さりとはつれないお師匠様」のチョボで、将監に向って手をふりあげようとする型など、せっぱつまった又平の心理が、いたずらに様式に流れずに、ぐっと前へ出て来るいい型だ。しかも菊五郎は、手をあげることが師弟の道にもとるという考えで、左手で右の袖口をまくりかけ、右手は下にさげたまま拳をにぎり、ぐっと突っ張って立ち、この形が「さりとはつれない」の文句一杯で、おとくにたしなめられ、「お師匠様」で左手を袖口から離し、その手で将監を指し、おとくをふり返って泣いたのである。菊五郎流の丸本歌舞伎の演技として、忘れがたい瞬間であった。

このあと、使者に立つ修理之介をとめ、将監が怒って刀

に手をかける所で、二重の所まで行って「サア切らっしゃりませ」という所には、「死にたアい、切らっしゃりませ」という風な、間投詞に近いセリフが入っている。それを自然にいわせて、将監が「こいつ師匠を困らせおるわい」と普通の歌舞伎調で受けるあたりの、対照にも妙がある。（このセリフがよほど印象的だったと見えて、むかし歌舞伎の隠語で、困ることを「将監」といったらしい）

逆におとくが又平を引きすえ、「さりとてはおとましい、気ちがい殿ではあるわいのう」という所は、このセリフで、夫婦が力一杯にもみ合い、歌舞伎風の動きを見せ、そのあと、又平がおとくを打擲する自然な怒りになる。要するに、又平は、性格的に、歌舞伎の中ではめずらしく、自由に演じていい役で、周囲の人たちが、演技で、その又平にイキを合わせてゆくように出来ているのである。

夫婦愛の表現としては、「手も二本、指も十本ありながら、なぜ片輪にはならしゃんしたぞいなア」という箇所を、極致としなければならぬ。これがあってこそ、夫婦も死の決意が出来るのである。

又平が一生の思い出に、手水鉢に自画像を書きのこそうとする所、「名は石魂にとどまれ」との文句で、立身で水鏡をする時、吉右衛門はツケを入れたが、入れない人が多い。

ここで、手水鉢の上の柄杓を、舞台前方に落しておかなければならぬ。何故ならそれをとろうとして、おとくが、石をぬけた絵を発見するからである。あざとい段取りだが、やむを得まい。

この絵は、手水鉢の中に狂言作者がいて、又平の筆の動きに合わせて、観客席に向いて描いて行くのである。

おとくがそれを発見、下手の羽織の上にすわってうつむいている夫をつれて、絵の奇蹟を示す所は、皆の動きの無言劇である。このへんは、又平とおとくの二人の呼吸が合っていないといけない。又平が見ておどろき、床の早メリになり、二人の位置が入れかわって、最後に「かか、ぬけた」となる。「かか、ぬけた」は、いかにも歌舞伎らしいセリフで、本文にはない。

将監が出て膝を打ち、又平に土佐の苗字を許すことになる。物着の合方で衣裳を改め、大頭になる、ここで初めて、様式の中に又平は没入するわけだ。俳優の貫禄が、真新しい白足袋の足さばきで、舞台に大きくひろがって見える所である。

この舞の間に、小芝居などでは、筆をふんですべる型などを演じていたようだが、仮にも絵師が、武士の刀にも匹敵する道具を足にかけるというような演出は、愚劣であろう。ぼくは、又平が、今与えられた自分の名前を忘れてお

とくに教わる型さえ、賛成出来ないのである。これらは、すべて主人公をやや知能劣った人物として演じた「吃又」の誤れる伝統にもとづくものであろう。

おとくは、俗に「ととかか」といわれた、特殊な賢妻の役柄で、「毛谷村」のおそのと共に、立役よりも一歩前へ出ることを許されている女房役である。「五斗」の関女、「廿四孝」竹の子のお種と共に三女房の一つにもかぞえられている大役だ。セリフを淀みなくいうのが又平のどもりとの対応であり、しぐさとしては、将監に苗字のことをたのむ所で、「藤の花かたげたおやま絵や、なまず押えた瓢箪の」の文句に合わせ、白の手拭を、藤の花と瓢箪の形にするのが定石である。

雅楽之介は典型的な御注進で、黒の着附を肌ぬぎにし、浅黄のじばん、股立をとっている。修理之介は、又平を切ろうとする所さえある程だが、生意気に見えないように気をつける必要がある。

歌六の演じた台本が型と共に「歌舞伎」八十三号に出ているが、動きが多く、目まぐるしい又平である。特に将監が又平の懇願を無視して修理之介を使者に立てたのが、じつは又平をはげますためのはかりごとであったということになっているのは、改悪も甚だしい。

中の巻、本文の眼目である「相の山」は、「梨苑会」が復活した以前の、演出上の文献がないので、型についてはふれずにおく。

土佐将監閑居の場

役名 浮世又平、後に土佐の又平光起。狩野雅楽之介。土佐修理之介。土佐将監。百姓大勢。又平女房、お徳。将監娘、お梅。下女、おなべ。

本舞台、正面浅黄幕、上下藪畳。幕の内より百姓大勢立ちかゝり、簑笠の形、鋤鍬を持ち、わや〳〵言うている。どんちゃん竹法螺、勢子太鼓にて、よろしく幕あく。

一　どうじゃ〳〵、知れましたかの〳〵。

二　イヤ、もう三井寺の方から栂の尾まで追い廻して歩いたが、それからとんと見失いました。

三　それはマア、残念な事であったなア。

四　全体虎というものは、話に聞いたばかり。見た事のない獣で、この日本で見るとは、珍しい事もあればあるものじゃのう。

五　それ〳〵、これを見て置けば、末代までの話の種じゃ。

六　イヤ、途方もない事をいう人だ。おいらは田も畑も荒らされて、誠にそれは迷惑でござるて。

四　サア、これから広藪へ手分けをして追い出すようにしましょう。

五　なろう事なら生捕りにして、田地を荒らされた入合わせに、見世物に出して銭もうけをしましょう。

六　イヤ、欲の深い事をいう人じゃ。そんな事をいっていようより、

七　これからみんなで手分けなし、見つけ次第に叩きころし、

八　田地を荒らされぬようにしましょうぞえ。

皆々　それがいゝ〳〵。

○　サア、どざれ〳〵。

ト竹法螺太鼓にて、皆々つれ立って向うへ入る。知らせにつき、浅黄幕を切って落とす。

本舞台三間の間、高足の二重、本縁附石摺の襖、上手障子家体、この前に御影石の手水鉢、下手に誂えの藪畳、枝折扉、置舞台を並べ、二重上の方へ硯箱、筆立など飾りある事。誂え通り、勢子太鼓にて道具納まる。

ト床の浄るりになる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

女房お徳　市川左団次

ト向うより又平、木綿やつし、石持好みの形、藁づとを背負い、お徳、女房の拵えにて、一升樽をさげ出て来り、花道にて両人思入れあって、又平門口へツカ〳〵と来るを、

お徳　コレ〳〵こちの人、いかに御浪人なさればとて、お師匠様のこのお住居、案内なしに入るという事があるものかいな。

又平　エ、、石部金吉、金天窓。

お徳　ハ、、、、もとらぬ口で、口合が言いたいかいなア。

又平　いいたいお前とこうなったは、

お徳　エ、、またかいなア。

ト門口へ来て、

ハイお頼み申します〳〵。

へとおとなえぼ、下女は立ち出で、

ト臼挽の合方になり、奥よりおなべ、襷がけにて出て、

なべ　ハイ〳〵、案内とは、どなたでござんすえ。

お徳　ハイ、私でござりまする。

ト門口をあける、両人顔を見合わせ、

なべ　オ、、辛気、お徳さん、チトたしなみなさんせ。よ

へ茲に土佐の末弟、浮世又平重起という絵師あり。生まれついて口吃り、言舌明らかならざる上、家貧しくて身代は、薄き紙衣の火打箱、朝夕の煙さえ、一度を二度に追分や、大津の端に店借して、妻は絵具夫は画かく、筆の軸さえ細元手、登り下りの旅人の、童賺しの土産物、三銭五厘の商いに、命も銭もつなぎしが、日陰の師匠を重んじて、半道あまりを夫婦づれ、夜な〳〵見舞うぞ殊勝なる。

その人のように、何の案内がいりやんしょう。他人がましい。サア〳〵、お入りなされませ。

お徳　ハイ〳〵、さようなら御めんなされませ。

ト両人内に入る。

なべ　モシ〳〵お梅さん、お徳さんや又平さんが見えましたぞえ。

〽下女が知らせに、お梅は一間を走り出で、

ト奥より娘お梅、振袖衣裳にて出て、

お梅　オ、、又平どの夫婦の衆、ようござんした。今日はいこう風があって寒いゆえ、見えまいと思うたに、ようこそ〳〵。

お徳　この四五日は叶いませぬ用事がござりまして、その上急ぎの絵馬を請け合われまして、これではお師匠様へお見舞いに行くのが遅うなって、定めてお叱りであろうと、仕事を致しながら、そればかりを言うていられましたゆえ、俄に夫婦連れ立ちまして、お見舞いに参りましてござりまする。

お梅　そうとは知らず、この間は四五日も見えぬは、夫婦の者がどちらぞ気合でも悪いかと、気づこうていたわいナ。

お徳　これはありがたいそのお詞、いたみ入りますわいの。

なべ　それはそうと、お二人のお出でをおしらせ申そうかいのう。

お梅　ほんにそうじゃ、わたしがおしらせ申しましょう。

ト家体の傍へ行き、

と〻さん、又平どの夫婦の衆が見えましたぞえ。

将監　何、又平が来りしとや。それへ往て逢おうわえ。

〽物騒がしき折からに、将監一間を立ち出でて、

ト将監羽織袴の拵え、修理之介袴着流しにてつき添い出て来り、このとき向うにて、勢子太鼓、竹法螺の音聞こえる。

ハテ心得ぬ、猪狩りの勢子太鼓。この山科の広野に、猪猿のあろうようもなし。

修理　但しは喧嘩人殺しでも出来ましたか。何にもせよ、心得ぬ事でござりまする。

お徳　なるほど、御不審は御尤もでござりまする。只今夫婦づれにてこれへ参りまする時、大勢竹槍鋤鍬をもって、打ち殺せ〳〵と言うて参りましたゆえ、様子を尋ねましたれば、虎が出たと口々に申しました。

将監　馬鹿な事を。叡山か鞍馬のあたりより、猪がな出たものであろう。日本へ虎が出よう筈はない。

お徳　なるほど、さようでござりまする。

将監　コリャ又平、この四五日は参らぬゆえ、いかゞせしかと案じおった。ようこそ今日参りしよな。

修理　イヤ何、又平どの御夫婦の衆、最前より御挨拶も致さぬが、先生にもお二人の事おあんじなさるゆえ、私も一寸お見舞いに参りとう存じましたれど、筆の放されぬ事仰せられましたゆえ、御無沙汰の段、おゆるしなされて下さりませ。

お徳　これは〳〵、主を兄弟子と思し召して只今のお詞、ありがとうございまする。さてお師匠様へ申し上げます。春にもなれば日もめっきり暖かになりまして、世間は花見の遊山のと、ざわ〳〵致します。こなたは山蔭、御浪人のおつれ〴〵をなぐさめのため、嫁菜のひたし豆腐の煮しめ、小竹筒でも持ちまして、コウ関寺か高観音へお供を致し、春めく人でもお目にかけたいと存じ、常常夫婦が申しておりますれど、何を申しても家内は夫婦差し向かい、道者時分で店は忙し、洗濯物はつかえております。仕事ははか行かず、日がな一日立ちづくめ、お聞きなされませ。朝も夜のうちから馬士衆が小室節を唄うやら、夜がぱっと明けまするとと、店一杯に人だかり、これ〳〵見さっしゃれ、あれが評判の吃りじゃと、今ではこちの人の吃りが愛嬌になりまして、店が繁昌致しまする。こゝへも一枚彼所へもと、もてはやさるゝ私が嬉しさ。この頃は新ものが一枚出来ました。こんな事なら、一枚持って来て、お目にかけたらよかったのう。……何をするやらぬらくらと、急げば廻る瀬田鰻、只今膳所から貰いました練貫水の大津酒、夢々しゅうはございますれど、この春からお仕合わせも直り、鰻の穴を出るように、御世にお出遊ばしたら、御門前には大勢のお祝いの人々が入れかわり立ちかわり、その時の奏者は誰であろうな。

ト一寸又平を見て、

さしつめお師匠様の一番弟子、私どもの又平殿、しかつめらしゅう。その悦びにつきまして、土佐の苗字をお許し下され、派手な場所の席書も上下立派に。

ト構え、

シテ、其許様の御家名は。……ホヽオ、某こそは将監さまの一番弟子土佐の又平、なぞと申さるゝでございましょう。そうなりますれば、夫婦が悦び、御寿命は万々歳、おめでたい〳〵。ホヽヽ、私としたことが、自分の申す事ばかり、こちの人の吃りとわたしがしゃべりと、コウつきませましたら、よい頃な女夫が一組出来ましょう。ホヽヽ、オヽしんど。憚りながら、お茶一つ。

〽オヽおはもじと笑いける。

又平　エヽ、ようしゃべる嬶じゃ。

将監　オヽ、ようこそ言うてくれた。また練貫酒とは第一身が好物、また瀬田鰻は風味も格別じゃ。コリャお梅、

この酒を奥へ持ち行き、用意して置かしゃれ。

お梅　アイ〳〵。

〽お梅は奥へ立って行く。

ト樽を持ち、奥へ入る。

お徳　コレ〳〵又平どの、鰻をお目にかけなさんせ。

又平　これか、オヽ。

ト藁包を持ち出し、おなべをまねき、

なべ　又平さん、なんぞ用かえ。

又平　大きなばっちり。

ト仕方をして見せる。

なべ　なんじゃ、大きなばっちりとはえ。

又平　大きなばっちり。

なべ　大きなばっちり。何をいうのじゃ。

又平　エヽウヌ。

ト拳を振りあげる。お徳中へ入り、

お徳　アヽコレ、何をそのように腹を立てゝ、何がほしいというのじゃえ。

又平　大きな。

ト手真似をする。

お徳　アヽ、盆と鉢がほしいと言わしゃんすのかえ。

又平　そうじゃ。

お徳　モシ、大きな鉢と盆をかして上げて下さんせ。

なべ　そうかいなア。何じゃむしょうに大きなばっちじゃの、大きなオホヽヽ、よし〳〵又平さん、これかえ。

ト盆を出す。

又平　阿房め。

ト藁包の鰻を出し、盆の上へ載せる。さしがねの鰻そこらを逃げまわる。又平逃がしたるこなしにて、あっちこっち追い廻し、トゞ縁の下へ逃げ込む。又平あわてゝ縁の下をのぞき当惑のこなし。お徳これを見て、

お徳　これはしたり、何をしなさんす。せっかく持って来たものを、とう〳〵逃がしてからに。

又平　嬶、だんない、取れる〳〵。

お徳　そりゃ、どうしてとれるぞいなア。

又平　来年の煤掃にとれる。

お徳　何をいうのじゃ。

トこの時太鼓になり、向うより以前の百姓大勢出て来り、

百一　コレ〳〵、こゝの藪へ入ったぞや。油断さっしゃるな。

皆々　オヽ、合点じゃ〳〵。

トわや〳〵言うて、下手の藪の中へ入ろうとする。修理之介立ち出て、

修理　コリャ〳〵、そち達は何ゆえにかく大勢徒党をな

し、かゝる狼藉。この家を誰とか思う。只今こそは御浪人なれ、以前は江州高島家の絵所、土佐の将監さまの御閑居、慮外致すと許さぬぞ。

百二　ヤア、高島でも御影でも、石の悪い事をいえば、構う事はない。

百三　わしらが田畑を荒らさるゝ虎を探すのじゃ。邪魔すると、侍とは言わさぬぞ。

百四　そうじゃ〳〵、農業のさまたげすれば、

百五　誰でも彼でも用捨はせぬ。

皆々　叩き殺せ〳〵。

ト皆々立ちかゝるを、

修理　何を。

トキッとなるを、又平とめて、

又平　ア、待て〳〵〳〵。オ、、おれがいる〳〵。

ト門口へ出て、

エ、、日本に虎はないわえ。

○　ヨウ、なんじゃ、おかしな奴が出たぞ。コレ、虎はあるわえ。

又平　な、ないわえ。

皆々　あ、あるわえ。

ト皆々吃りの真似をしていう。又平むっとして、

又平　うぬ。

ト立ちかゝるを将監とめて、

将監　コリャ〳〵又平、待て〳〵。仔細を聞いていかようともなる事じゃ。しずまれ〳〵。

お徳　お師匠様がお留めなさるゝ。又平殿、待たしゃんせ待たしゃんせ。

将監　何、お身達は百姓そうなが、何ゆえあって身が屋敷にて立ち騒ぐのじゃ。様子を聞きたし、仔細はいかに。

百一　なるほど、お断わり申さぬはこっちが誤り。

百二　只今こゝの藪の中へ、虎を追い込みましてござりますゆえ、

百三　その虎を殺して、田地をあらさぬようにしようと、存じましての事でござりまする。

将監　なんと申す、この藪の中へ虎を追い込んだ。ハ、、ハ、わっけもない。虎と申すものは異国の猛獣、日本の地へ出ようか。いかに土民なればとて、馬鹿な事を。

トこの時風の音になり、下手の藪へ虎現われる。皆々見て、

皆々　あれ〳〵、あそこへ出て来た〳〵。

将監　なんじゃ、虎が出た、ドレ〳〵。身共が見届けてつかわそう。

ヘ目鏡取り出し将監は、庭に下り立ち、ためつすがめつ打ち眺め、

ト二重より下りて庭下駄をはき、目鏡をかけ、

ハテ不思議や。顔輝の筆の竹に虎の筆勢、少しもまごう方なし。しかも新筆、今これほどに書かんずもの、狩野の祐勢が伜四郎二郎元信よりほかになし。頭の筆勢眼のするどさ、書きも書いたり、見事々々。

〽しばし見とれて、

イヤナニ百姓衆、これは誠の虎にあらず。名筆の画に魂入って抜けたるに相違なし。その証拠には、あの虎が駈けて来た跡に、足形があるまい。サア、尋ねて見やれ。

百一　ヘイ〳〵、それは不思議な事でござりまする。皆の者、気をつけて探さっしゃれ。

皆々　合点じゃ。

ト皆々あちこちを探す事あって、

百二　どうじゃ、あるかの〳〵。

皆々　ないぞや〳〵。

百三　ヘイ、どう見ても足跡は、

皆々　ござりませぬ。

ト将監思入れあって、

将監　あるまい〳〵。まだお身たちに不思議な事を見しょう。虎をば眼前に書き消して見せ申そう。コリャ、硯もて。

修理　かしこまりました。

ト上手より硯箱を持ち来り、よき所へ置く。修理、手をつかえ、

ハッ、先生へお願い申し上げまする。某拙き筆なれども、何卒あの虎を書き消しとうござりまする。この儀お聞き届け下さりますよう、ひとえに願い奉る。

ト又平これを聞いて、修理之介を突きのけて、

又平　お師匠様へ申し上げまする。兄弟子の私に仰せつけられ下さりましょう。

修理　何卒私に。

ト又平を引きのける。

又平　イヤ、私に。

トまた突きのける。

修理　イヤ、私に仰せつけられ下さりましょうなれば、ありがとう存じまする。

将監　いかにも聞き届けた。修理之介、其方が願いに任せ、申しつけた。大切な場所、心静かに。

修理　ハッ。

ト硯箱より筆を取り出し、よき所へ行く。

〽修理之介は筆を染め、四五間間を置きながら、虎の順にさし当て、筆引く方に随って、頭前脛後脚、胴より尾先に至るまで、次第々々に消え失せるは神変術とも言っつべし。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com